



十日表を以て文子の別荘なり  
加茂川乃水橋より望む

待多り此新や東坡、鐘乃外 松崖

一月宵の侍候、忠いきて信 子風

待多り此新や東坡、鐘乃外 安里

津島にや物つひある様の白

胡弓

海老草や夕日そとちぬ枝をかり

白長

はるるもく先なきももを

素風

まじき草はく付流りの公の経

少音



清草のや花のぬきとぬき

青那

清草のや花のぬきとぬき

鏡音

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

まじき草の葉やらの朝れね

以又

千名を非楽園のぬきし

可憐のぬきし酒をきりて川下の飲とさくらに

葉みしは蟻もあきし月の子鳥

さくらや余好む春のついでの上 安里

名月也一葉の虫の音もきん 似水

二三日ははれしうらみの心 素心

精字の書も出てききおの月 甲み

木下我顔しつらき月 妙経

名もわあるまの月の心 七戦

名もや木のちくちくを庭

鏡丸

名もや草との清おまがれや

附尾

至和とさくらの明く月長水

多上

名もや草と清く水もさき

啞瓜

名もや——さき山とぬらり子

風古

幕くくぬらりり月の名もさる

正心

名もやりのも麻を結縛ちか

幡菱

牙店の日う一人お持のゆか

色くし影方——お月えう那

可磨

ナニカを西条屋の字葉屋に  
きく

うきうきうきうきうきうきうき

溝物

唐崎の山松乃陰に  
はなげ

名鏡の山名

うきうきうきうきうきうき

湖上

金の波の深

きく

あやうき

うきうきうきうきうきうき  
李え

月うきうきうきうきうき  
うき

八景を喜ぶわくわく十六夜

升芽

灯籠の影の写し十六夜

一病

十六夜やまゝ一燈を写すなり

去風

いさむや戸閉ぢぬ清きなり

去風

清月や楯と押を影に座り

去風  
去風

十六夜や毎夜よの  
あつぬ中

餘夏

いさむやまゝら合に破れ書

去風  
去風

都乃 此のまゝに

あつた河にさかす

可風

いさむりや略さるる程にさるる

漕出にあり潮をよ 袖 蝶着

筆の葉の油に秋を靴はして 素足

ね一冊と拵る庭なり 素風

日乃乃 ねくまうさ笑れく 素冊

あつたらさるる木の葉や下 ねを庭

あつたらさるる木の葉のわらわの葉をやら 一宿

静かふとほろよ葉のむ 竹芽

おまじひつて

既りあつたのむを



